

聖書：使徒7：17～43

説教題：モーセとキリスト

日時：2013年9月15日

使徒の働き7章、ステパノの説教の続きです。ステパノはユダヤ人から二つの点で訴えられました。6章13節にありましたように、神殿と律法とに逆らう言葉を語っているということです。ユダヤ人にとってエルサレム神殿とモーセ律法は宝の中の宝でした。その二つについてステパノは見過ごすことができない言葉を語っている。すなわち6章14節にあるように、「ナザレ人イエスはこの聖なる所をこわし、モーセが伝えた慣例を変える！」とステパノは語っている、と彼らは訴えました。こうしてステパノはサンヘドリンで自分の立場の弁明また説教を行なったのです。彼はまずイスラエルの歴史を振り返り、大きく4つの時代を取り上げています。すなわちアブラハム、ヨセフ、モーセ、そしてダビデとソロモンの時代です。前回はアブラハムとヨセフの時代を見ましたので、今日はその続きのモーセの時代を見て行きます。以下、三つの点にまとめて彼が語っていることを見て行きます。

まず第一にステパノが述べていることは、約束に真実な神のお姿です。神はアブラハムを召し、子孫を与えると約束され、その子孫は外国に移り住み、400年間奴隷にされ、虐待されること、しかし神がその国をさばかれ、アブラハムの子孫はそこから出て、約束の地に戻って来ると言っておられました。その通り、アブラハムに子孫が与えられ、彼らはエジプトに住みました。そしていよいよそこから出て来る時がやって来ます。17節以降にありますように、神がアブラハムにお立てになった約束の時が近づくに従って、民はエジプトの中に増え広がります。そしてヨセフのことを知らない別の王が王位に着き、イスラエルを奴隷とし、虐待します。そういう状況の中で出エジプトを導くために、神はモーセという器を用意されます。そのモーセについて20節に「彼は神の目にかなった、かわいらしい子で」とあります。赤ちゃんはみな可愛いですが、モーセは特別にかわかったようです。出エジプト記2章2節：「女はみごもって、男の子を産んだが、そのかわいいのを見て、三か月の間その子を隠しておいた。」ヘブル書11章23節：「信仰によって、モーセは生まれてから、両親によって三か月の間隠されていきました。彼らはその子の美しいのを見たからです。」彼は川に流されますが、神の摂理によって、エジプトの王パロの娘に拾い上げられます。そして王家で育てられ、あらゆる学問を学ぶ環境も備えられ、ことばにもわざにも力ある人へと成長します。そんな彼に40歳の時、転機が訪れます。彼はイスラエル人を顧みる心を起こし、同胞を助けようとしています。25節にありますように、モーセは「自分の手によって神が兄弟たちに救いを与えようとしておられることを、みな理解してくれるものと思って」いました。ところがそうは認めてもらえませんでした。むしろ「誰がおまえをおれたちの支配者や裁判官にしたのか、昨日エジプト人を殺したように、おれたちをも殺す気か」と言われ、ミデアンの地に逃亡します。モーセはそこで挫折の40年を味わいます。しかし神はそれで放置しませんでした。さらに40年経った時、主は燃える柴の中からモーセに語りかけられます。「わたしはあなたの父祖たちの神、アブラハム、イサク、ヤコブの神である。」と。そしてエジプトにいるわたしの民を救い出すためにあなたを遣わす、さあ行け！と言われます。そしてモーセを用いて行かれます。ここに神の真実が証しされています。神や約束を与えて、守らない方ではありません。神はアブラハムへの約束に

従って事を起こされる神。歴史を振り返る時に、そのことがはっきりと見えて来ます。神は真実にご自分の民を導かれる方なのです。

そしてここには前回に続いて、神は世界の様々な場所で働かれる方であることが明らかにされています。メソポタミヤ、ハラン、カナン、エジプトに続いて、さらにエジプトで、またミデアンで、荒野で…。そして燃える柴の中からモーセに語られた時、主はそこを「聖なる地」と言われました。聖都エルサレムからはるかに隔たった場所がそう言われています。すなわち神はエルサレム神殿にしかおられない方ではない。神は全世界のどこでも自由に働かれるお方。そして神が働かれる場所はどこであれ、シナイの荒野であれ、聖なる地となり得るのです。

さて、このような真実な神に対して、イスラエルはどのように応答したのでしょうか。特に神が立てたモーセに対してどうだったでしょう。そのことを第2に注目したいと思います。まず40歳の時のモーセに対してです。23節にありましたように、モーセはイスラエル人を顧みる心を起こしました。そして同胞を助け出そうとしました。しかし彼らは理解しませんでした。2日目にイスラエル人同士が争っていて、モーセは彼らを和解させようとしたのに、彼らは受け入れませんでした。確かにこの時のモーセには、未熟な点があったと言えます。まだ救い主としての働きをなすには機が熟していませんでした。しかしこのイスラエル人の姿に、すでに彼らの基本姿勢が示されているとステパノは言いたい。すなわち神が立てた使者に逆らい、拒絶するというスタンスです。40年後、再びモーセがイスラエル人の前に現れます。今度はモーセははっきりした神からの召命を持っていました。35～38節に「このモーセが」とか「この人が」という言い方が4回続けて記されています。一つ目は35節。ここではこのモーセを神が遣わしたことが強調されています。一度は人々が拒んだモーセを神が支配者また解放者として遣わした。2つ目は36節。ここではモーセがエジプトから民を導き出したことが述べられています。エジプトでは有名な10の災害をもって、また紅海では海を二つに分ける奇跡を行なって、そして荒野で40年間もモーセは不思議なわざとするしを行なってイスラエルを導きました。3つ目は37節。ここではモーセがキリストを指し示したことが強調されています。彼は人々に「神はあなたがたのために、私のようなひとりの預言者を、あなたがたの兄弟たちの中からお立てになる。」と言いました。これは単に私と同じようなもう一人の人と言うより、モーセが指し示す究極の一人、すなわちメシヤのことです。そして4つ目は38節。モーセは荒野の集会の中で生けるみことばを取り次ぎました。ここの「荒野の集会」という部分には印がついていて、欄外の注の38を見ると、ギリシャ語で「エクレシヤ」とあります。これは他では「教会」と訳されている言葉です。つまりここに示されていることは、教会は新約時代から始まったものではないということです。あの荒野における民も「教会」であった。そこでモーセは十戒を含む、生けるみことばを授かり、民に取り次いだのです。

このモーセに対してイスラエル人はどうだったのでしょうか。一言で言って彼らはこのモーセを退けました(39節)。そしてエジプトに帰りたいと言い、見える偶像を求めました(40節)。モーセがシナイ山に登っている間、イスラエル人はモーセがどうなったか分からないと言って、アロンに金の子牛を作らせ、これぞ我々を導く主なる神だ!と言って好き勝手な礼拝をしました。そして自分の手で作ったものを楽しんでいました。これはまさしく偶像礼拝に他なりません。

ユダヤ人はステパノに対して、あなたはモーセに逆らっている！と非難しましたが、歴史を振り返る時に分かることは、イスラエル人こそモーセを軽んじ、モーセに逆らって来たということです。律法を大切に守って来たどころか、彼を退けて好き勝手な偶像礼拝をして来たのです。

第3に見たいポイントは、このようなイスラエルの姿は、荒野時代だけの問題ではないということです。42～43節でステパノはアモス書5章25～27節を引用します。このアモスの言葉は、イスラエルが南北に分裂した後、北イスラエル王国のアッシリヤ捕囚を預言した言葉です。イスラエルの偶像礼拝はいよいよ発展して、天の星をも拝むようになっていました。モロクあるいはモレクはアモン人の神です。レビ記18章21節：「あなたの子どもをひとりでも、火の中を通らせて、モレクにささげてはならない」もう一つのロンパの神とは、エジプトの星の神の名であり、特に土星と関係するものだったようです。アモスはその偶像礼拝を非難しましたが、その彼らの性質は荒野時代にまでさかのぼると言っているわけです。あの金の子牛事件に示されたイスラエルの偶像礼拝の傾向が脈々と受け継がれて、天の星への礼拝となっていた。そこにはイスラエル人の一貫した背信の流れがあるということです。神が彼らを行くがままにされたので、彼らは一層その道を進むというさばきを受けていた。そしてアモスの預言では「ダマスコのあなたへ」となっていた部分が、ここでは「バビロンのあなたへ」と置き換えられています。ご存知のように北イスラエル王国は南ユダより墮落が早く、紀元前721年に捕囚の憂き目に会いました。南ユダはそれよりまだましだったとは言え、紀元前586年にバビロン捕囚のさばきを受けました。つまりステパノは北イスラエルへのさばきを預言したアモスの言葉は、南ユダにも当てはまると言っているわけです。そして今、ステパノの説教を聞いているエルサレムのユダヤ人は歴史的には南ユダに属する人々でしたから、ステパノは彼らに対して、あなたがたの先祖もこの偶像礼拝の罪を犯してさばかれたのだ、と言っているわけです。そしてそれはさらに、今のあなたがたもその子孫として、同じ罪を犯している、それゆえやがてさばかれる、と言わんとするものだったのではないのでしょうか。すなわちイエス・キリストを退けることにおいて、かつてのイスラエルと同様、好き勝手な偶像礼拝をしているだけ。モーセを我々は大切にしていると言いながら、実際には彼を退けた彼らの先祖たちと同じ行動を取っている。ですからステパノはこの説教の結論部分である51節で「かたくなで、心と耳とに割礼を受けていない人たち」と言い、「あなたがたは、父祖たちと同様に、いつも聖霊に逆らっているのです。」と言います。また52節で「あなたがたの先祖たちが迫害しなかった預言者たちが。だれかあったでしょうか」と言い、「あなたがたも同じことをしている」と言うのです。そして53節で「あなたがたは律法を受けたが、それを守ったことはない！」と糾弾するのです。

私たちは今日の御言葉の前でどうでしょうか。モーセは確かに神によって立てられ、偉大な働きをしました。しかしそのモーセは、私の後から来るもう一人の預言者、キリストにこそ聞け！と言いました。ユダヤ人たちは、イエスはモーセの慣例を変えると行って騒いでいましたが、当のモーセは私の後から来る究極的な預言者メシヤにこそ聞け！と言ったのです。ですから、その預言者によって、たとえモーセが語ったことに変更が加えられても、私たちはその方の言うことにこそ聞くべきです。そしてキリストは決して本質的な変更を加えませんでした。「わたしが来たのは律法や預言者を廃棄するためだと思っはなりません。廃棄するためではなく、成就するために来たのです。」イエス様はモーセ律法を投げ捨てるどころか、これを

完全に守り、満たすために来られました。私たちが救われるためには、私たちの罪のための犠牲が払われなければならないと律法は語っていますが、イエス様は十字架における身代わりの死をもって、その代償を全部払ってくださいました。ですから旧約で規定されていたいけにえの儀式は不要となったのです。またキリストは私たちと同じ人間となられて、律法が命じる行ないをすべて行われました。ですから私たちは、このキリストにより頼むことによって全き罪の赦しと全き義を頂くことができるのです。旧約の様々な規定は、このキリストによる救いへと私たちを導くためのものでした。ですから私たちは依然としてキリストが来る以前の様々な律法の規定にしがみついているべきではなく、その律法を成就し、私たちを救ってくださるキリストにこそ、心と関心を集中すべきなのです。それこそがモーセに聞くことであり、またモーセを遣わした神の御心に従うことなのです。

モーセは来たるべきキリストのひな形です。モーセがエジプトの奴隷状態から民を救い出したように、キリストは私たちを罪の奴隷状態と滅びから救い出してくださいます。またモーセが荒野の集会において生けるみことばを与えて導いたように、キリストはご自身の十字架と復活に基づく真のいのちのみことばをもって私たちを導いてくださいます。私たちの今週の歩みも、荒野に行くような歩みかも知れません。しかし荒野でモーセが生けるみことばをもって民を支え導いたように、キリストはより豊かで力強い生ける言葉をもって私たちを生かし、導いてくださいます。私たちはそのキリストにこそ聞いて、いのちの道を歩みたいと思います。天に着くまで、なお荒野に行くような日々の連続であっても、この生けるみことばを賜わるところに神の豊かな祝福と臨在があります。エルサレムの宮に行かなくても、キリストに聞くなら、そこが聖なる地であり、神の守りと祝福が豊かに注がれる恵みの場所なのです。